



『日没』

桐野夏生 岩波書店

本 館	請求記号：J/913.6/Ki54	資料ID：701717225
-----	-------------------	----------------

岩波現代文庫（文芸）

本 館	請求記号：X/080/I95B/352	資料ID：701839813
-----	---------------------	----------------

文学部准教授 丸井 貴史

書物は人々に有害な情報をもたらし、社会の秩序を乱すものであるがゆえに、書物を所持していることが発覚した際には、ファイアマン（昇火士）によってそれが焼却されてしまうという絶望的な世界を、レイ・ブラッドベリは『華氏451度』において描き出した。これは読書による愉楽を知る者にとって耐えがたいディストピアであるのだが、それとは少し異なる視点から、作家にとってのディストピアを描いたのが桐野夏生の『日没』である。

作家のマッツ夢井は、総務省文化局・文化文芸倫理向上委員会（通称「ブンリン」）から召喚状を受け取る。過激な小説を書き続けている彼女は、社会に適応した作品を書けるようになるために、療養所において更生しなければならないのだという。マッツはそれに激しく抵抗するが、この施設で日々を過ごしているうちに、すでに転向した仲間が多くいることを知る…。

作品に描かれていることと作家の思想はイコールで結ばれるものではないし、社会的な「正しさ」に絶対的な基準はない。そうした当たり前のことを理解できないのがブンリンなのだが、さて、私たちははたしてブンリンを笑い飛ばせる社会に生きているのだろうか？ 倫理や規範や道徳が内包しているおそろしいほどの暴力性に、本書を通してぜひ気づいてもらいたい。小説としての面白さは保証します。